

思ふに支那經濟史の研究は最も必要なことを感ぜられ乍ら、その研究は同時に最も困難なことであり、實際に従事した者のみが體驗し得る。決して彼の西洋の書物等によつて手取早く支那通にならうとする人達の知る所ではない。この點著者が支那經濟史研究に志し、先づ廣く根本史料を探索し、新出の宋會要、四庫全書珍本叢刊等の資料を購使し、或は靜嘉堂文庫の秘籍を探り、最近には又遠く滿洲に赴いて四庫全書の未刊本を涉覽せる努力は多とすに足る。而して經濟史への道徑として宋代財政史に着目したのも亦贊成である。蓋し宋代は支那經濟史上の一大轉換期に當り、近代的社会組織が固定したる時期である。又支那の經濟問題は財政上の必要によつて論議され、經濟記事は財政を中心として輯録されてゐるから財政を無視しては、經濟一般を論ずるに一步も前進出來ぬのである。著者の努力は醫學に於ける基礎解剖學にも比す可く、混沌として無秩序に積み上げられたる舊籍の中より、先づ財政の骨格や血脉を迎つたものであつて、何人も疑ふ可からざる結果に到達したる點に於いて筆を止めてゐる。それ以外の假説に類する範圍に至つては、著者の目的とする所ではないであらう。

現時我國は恰も宋代の如き非常時下にあり、たとへば事變が終了しても、世界の形勢は我國をして直ちに平時財政への早急な復歸を許すまいから、此書を熟讀玩味せば、今後の時局財政に對しても重要な示唆を與へらる可きを疑はない。只財政には常に財政上の術語あり、一般人に難解なものであるが、特に支那に於いて甚しとする。之を正確に今日の國語に翻譯することは殆ど不可能

であつて、本書も恐らく一般讀者にとつては著しく難解な點があるかも知れない。併し忠實な讀者には卷末の便利な索引がその困難を救ふに役立つであらうと信ずる。

さばれ宋代財政上の問題は本書に盡きてゐる譯ではない。當に大いに論ず可くして、説いて詳かならざるものがあり、課利、即ち賦税に對立する專賣制度の如きがその例であり、父子に關聯しては銅錢及び金銀の問題が併せ考察する可きであらう。尤も此等の問題に關しては、著者の意或は、既に他に其人あり、論者の公にされたるものもあれば、之と重複するを避くるにあつたと思はれるが、亦著者獨目の見解もある筈で、現に本書に包含されざる論文も既に發表されてゐるのである。宋代財政史續編の出現を待望する所以である。(菊判四六二頁、索引九頁、定價五圓、生活社刊)(宮崎市定)

結城宗廣

結城宗廣事蹟顯彰會發行

昭和十三年は吉野朝隨一の忠臣結城宗廣卿戰死してより滿六百年に相當するので、其の盡忠事蹟を顯彰せんとして、結城宗廣事蹟顯彰會が組織せられ、其の一つとして、この「結城宗廣」なる廣澤なる傳記が刊行された。

本書の前編「結城宗廣」は結城氏の故地白河にありて久しく郷土史の研究に没頭精進して居られる深谷賢太郎氏の筆に成るもので、宗廣卿の事蹟を微に入り細を穿ち、未だ嘗て見ざる精細なる

傳記であつて、しかも一々が古文書に立脚せる正確なる考證である事が偉とするに足るものであらう。

後編「結城氏小史」は秋田白川の結城家を繼げる當主結城錦一氏の筆に成るもので、鎌倉時代より幕末維新に到る間を各時代に分けて結城氏の活躍を克明に調査された成果であつて、結城氏なる一大名家の全貌を明瞭に見る事が出来るもので、かうした一族の長きに亘る歴史を記したものが稀有である現在に於いては斯界特有の研究として推賞するに足りよう。殊に附稿として結城氏系譜に關する研究が併收されて居るが、これを知らずして結城氏を説くは、舵を執らずして大海を航く船の如きものであつた事を、しみじみと思はしめる。そして錦一氏ならでは余て及ばない研鑽であると思ふ。

更に吾人は最後に收められたる外編の「結城文書とその傳來」

「結城文書による史實の發見」の二篇に一層の敬意を拂ふ。

前者は結城錦一氏の稿する所に係り、結城文書の相傳、傳寫に關する研究で、これによりて從來に知られて居る結城氏關係史料の交錯出入せる事情を充分に知る事が出来ると共に、關係史料の性能をも明かにする事が出来る。後者は史料編纂所の松本周二氏が執筆する所にして、(一)所謂恒長親王の論旨なるものによつて太平記の記事を裏書せる事や、それに署名せる「左中將」は新田義貞に非るべしと斷ぜる事、(二)建武中興崩壞の原因は上層部の奢侈と分裂にある事、(三)所謂春日少將は顯信に非ずして顯國なるべき事、等を立證せるものである。

私は一昨年春なほ淺い頃、武藏野の昔の姿そのまゝに残る浦和の一角に錦一氏の御宅に伺ひ、其の裏藏文書の披見を許された一人であるが、餘りに立派な文書の現存せる事に、寧ろ呆然たる半日を暮した事があつた。さうして錦一氏等の努力によつて此の種研究の近く世に問はるゝ日あるを聞き、其日の實現一日も早からん事を鶴首して居つた。

其の期待は決して無駄ではなかつた。

茲に責任を以て此の書を推賞し得るを悦ぶものである。(浦和市北浦和中山東、結城宗廣事蹟顯彰會發行、定價、四八〇)(中村)

新版タキトウス・ゲルマーニア

田中 秀央 共譯
泉井久之助 校

ゲルマーニ民族の激烈な活動力の奔流は彼等を圍繞する世界の秩序を突き破つて新たな世界を開拓する。古代から中世への轉換がさうであり、近世から現代への現在の轉換現象が又さうである。そもそもゲルマーニ民族とは如何なる民族であつたか、それはひとり西洋史研究者の學問的關心にとどまらず、現代に生きる者みな一般的興味をも惹く問題であらう。所で原始ゲルマーニの研究は無論今に始るのではない。古くは十六世紀——十七世紀にフランスに於いて王權の絕對性に對して貴族の自由を擁護しようとし、その論據を原始ゲルマーニの自由主義に求めんとしたフランソワ・オートマンがあり、十八世紀にはブーランヴェイエ伯、モン